

# 白紙撤回の 波紋

## 三田市民病院再編統合



インタビュー ㊦

済生会兵庫県病院長

左右田 裕生氏

# 病院は命助けられる距離に

多くの大規模病院がある神戸市南部に比べ、北区に急性期病院は少ない。その一つである済生会兵庫県病院の左右田裕生院長は、田村克也市長が掲げる三田市民病院との再編統合の白紙撤回に当惑する。

左右田院長 市長選の選挙結果は尊重するが、どのように最終決定するのか明確な方針は示していない。具体的な説明がないままの白紙撤回に戸惑いを感じる。昨年6月の三田市、神戸市との合意は、北神・三田地域の急性期医療を守るためには再編統合の道しかないという一致した考えの下だった。いろいろな困難を乗り越え、互いに妥協してこぎつけた最善の選択だ。医師の思い、3者合意の重みを踏まえ、枠組みに戻ってもらいたい。

—三田市民病院との再編が必要な理由は。

左右田院長 済生会兵庫県病院は「地域周産期母子医療センター」に認定され、ハイリスク妊婦、新生児を24

## 再編統合で病床増、常勤医は130人超

時間365日受け入れている。時には400名前後で生まれた子どもの治療も手がけてきた。ただ、母子医療は他の科が充実しているのが大事。再編統合されずに急性期医療が収縮すると、立ちゆかなくなる可能性が出てくる。

人口減少で2035年ごろをピークに急性期の患者が減少すると予測され、二つの病院が両立していくのは難しい。急性期医療を担う基幹病院としては常勤医（三田市民76人、済生会61人）が十分ではなく、医師の働き方改革などを踏まえると医師の確保はさらに厳しくなる。医師にとって魅力のある病院になるには、今の病床数（三田市民300床、済生会268床）では規模が小さく、最低400床以上が必要。コロナのような新興感染症対策や病院の老朽化も課題だ。

—再編統合しない場合はどうなる。

左右田院長 互いに自力で建て替える力はない。たとえしたとしても病床数は増やせず、中身の伴わない中途半端な病院になるだろう。医師らを引きつける「マグネットホスピタル」には

なれない。現状でも六甲山や阪神の南部に患者が搬送されているが、やがて急性期病院の看板を下ろすことになる。

再編統合すれば、国から有利な財源が得られる。病床数も増えて常勤医は130人超と基幹病院としての機能を十分に果たせる。これまで提供できなかった分野のがん診療、脳や心臓の疾患に対応できるようになる。他科が充実することで周産期の機能も高まり、小児医療も充足する。大阪や神戸市中央区に行かなくても、この地域で完結できる。

—三田市長選の神戸新聞出口調査では、42%が再編統合に反対だった。

左右田院長 救命できない病院が目の前にあっても意味がない。六甲山の北側で命を助けられる距離にあることが大切だ。私たちの調査では、新病院の整備候補地（神戸市北区長尾町宅原）まで車で10分圏内の人口は、今の各病院の10分圏内より増えるというデータもある。

（橋本 薫、土井秀人）